



Title	季節の喜び
Author(s)	辻野, 直三郎
Citation	makoto. 1973, 2, p. 3-3
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86278
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本の四季、私は宇宙天地のこの自然現象をこよなく愛する者の一人である。北海道の涯(はて)から沖縄の南端まで直線距離にして約二四三六km余。これは前に昭和基地より南極点踏破に成功した村山越冬観測隊長が築いた極点調査旅行隊の距離(二三五二km)にほぼ相当するのではないかと思う。

この東西に延びた長い国土には春夏秋冬という自然のうつり変わりは日本人にして味わうる楽しくも嬉しい特権ではなからうか?。この美しい自然の四季のうつり変わりに長く住みなれてみると、ともすればこれに不平をいう者もある。かつて私もその一人であった。しかし一歩外国に出たとき日本の国土四季の美しさは日本国に住む者の最大の天の恵みであると感謝す

る。春は百花繚乱(りようらん)夏は海に、山にはほととぎす、秋に中秋の明月を愛(めで)ての宴、菊の九重の節句、冬は細雪(さざめゆき)のなかに雪だるまとスキーに楽しめる少年時代の思い出などは国外では到底味わくもない四季のうつりかわりでもある。

り日本人あげての喜びであります。私はその名文の一節を借用することをお許しいただきここに紹介申上げる。(朝日新聞十二月二十六日所載)

美しい日本の私とその序説―春は花夏はほととぎす秋は月冬雪さえて冷(すず)しかりけり。道元禪師(一一〇〇年―一五三年)

季節の喜び



辻野直二郎

さきに日本人として初めてのノーベル文学世界賞を受けられた故川端康成先生は一九六八年十二月十二日、ストックホルムのスウェーデン、アカデミーで

「美しい日本の私―その序説」と題して受賞記念講演をなされたことは記憶に新しいことであ

の「本来の面目」と題するこの歌と

雲を出でて秋にともなふ冬の月
風や身にしむ雪や冷たき。

明恵上人(一一七三年―一二三二年)のこの歌とを私は揮毫(きこう)を求められた折に書くことがあります。明恵のこの歌に

は日本の国土の美しさを知らない国民は眞の日本人として、国を語る資格はないのではないか?と思う。しかしながら終戦後

高度経済成長の影に、如何に多くのこの美しかるべき国土、自然環境が破壊されて人災の名において豪雨禍になやまされ、或

は公害の名において私害により清かるべき大気は汚染され、飲料水にも適さなくなってきた水道源と河川、日照権すら叫ばなければならなくなった過密都市の現状等、人類に生きるために平等に授かった天の恵みが人間のあくなき慾望のために破壊されていくことは宇宙、天の摂理に対する最大の冒瀆でなくてはならないか?。今こそ人類永遠の生成発展のために謙虚にして大膽(だいたん)にこの病源に取組まねばならない時期に来たのではあるまいか?。一度失われた自然と環境は永遠に原(もと)にかえらないものもある。今こそ声を大にして未来と子孫へ引継ぐためにも天下に叫ぼうではありませんか?

(妄言多謝)